藤村詩集

日本近代文学

日本近代文学大系 15

藤村詩集

解説 山室 静
注釈 関 良一
剣持武彦

角川書店

山室　静（やまむろしずか）

明治39年（1906）長野県佐久市に生まれる。昭和17年（1942）東北大学美学科卒業。現在日本女子大学教授。主要著書，評論集『文学と倫理の境で』『踊り場にて』，詩集『時間の外で』，研究『北欧文学の世界』『アイスランド』，小説集『何のために』。その他訳書多数。

関　良一（せきりょういち）

大正6年（1971）東京都に生まれる。昭和16年（1941）東京文理科大学文学科卒業。日本近代文学専攻。現在専修大学文学部教授。著書『評釈現代文学　近代詩』（昭31　西東社），『近代文学注釈大系　近代詩』（昭38　有精堂），『日本近代詩講義』（昭39　学燈社），『樋口一葉考証と試論』（昭45　有精堂），「逍遙・鷗外　考証と試論』（昭46　有精堂），論文「藤村詩の形成」（「文学」昭18・12，19・3），「藤村詩と先行詩歌」（「山形大学紀要（人文科学）」昭27・3），「『若菜集』の世界」（「国文学」昭46・4）。

剣持武彦（けんもちたけひこ）

昭和3年（1928）横浜市に生まれる。昭和23年，二松学舎専門学校卒業。同27年，日本大学法文学部英文科卒業。同36年，東京都立大学大学院修士課程（国文学専攻）修了。日本近代比較文学専攻。現在二松学舎大学助教授。著書『西洋文学入門―比較文学のためのノート』（昭46　教育出版センター），主要論文「正宗白鳥『ダンテについて』の成り立ち」（「比較文学」昭37・10），「ダンテの『新生』と島崎藤村の『新生』」（「二松学舎大学論集」昭43・3），「ハムレットと金色夜叉」（「短大論叢」昭46・3）。

日本近代文学大系　全60巻　　第15巻　藤村詩集

昭和46年12月10日　初版発行

注釈者　関　良一
　　剣持武彦
発行者　角川源義
印刷者　村沢達弘
製本者　鈴木俊一

別巻引換券は最終回配本まで
保存しておいて下さい。

発行所　株式会社　角川書店（かどかわしょてん）

東京都千代田区富士見2―13―3
電話東京（265）7111〈大代表〉
振替東京 195208
郵便番号 102

落丁・乱丁本はお取替えいたします　　旭印刷・鈴木製本

0392-572015-0946(0)

目次

凡例　五
藤村詩集解説　山室静　七
藤村詩集注釈
若菜集　関良一　一九九
一葉舟　剣持武彦　一八七
夏草　剣持武彦　二八七
落梅集　剣持武彦　四二
補遺「炉辺」　関良一　五六一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

藤村詩集合本序　関　良一　五三
補　注　五七三
参考地図　六四〇
参考文献　六四四
年　譜　六五三
藤村詩文初出一覧　六六五
藤村詩集構成一覧　六六八
注釈者あとがき　六七六

凡　例

一、本書には、島崎藤村の詩集『若菜集』『一葉舟』『夏草』『落梅集』の全文、詩の最終作と目される「炉辺」、合本『藤村詩集』（初版・改訂版・改刷版・『藤村詩抄』）の序を収録した。

一、本書は、解説、作品本文、本文に対する注釈（頭注および補注）、参考地図、参考文献、年譜、藤村詩文初出一覧・藤村詩集構成一覧をもって構成した。

一、本書の本文は、詩集については初版本を底本とした。すなわち、『若菜集』『一葉舟』『夏草』『落梅集』はいずれも春陽堂刊の初版本を翻印したものである。「炉辺」は『藤村詩集』改訂版（大1・12　春陽堂）の、合本詩集の序は『藤村全集』第一巻（昭41・11　筑摩書房）の本文をそれぞれ底本とした。

一、本文の漢字はできるだけ底本に近い字体を用い、変体がなはすべて現行の字体に改めた。かなづかいは『若菜集』においては底本の形を保存し、『一葉舟』以降は歴史的かなづかいに整えたが、いずれの場合も必要に応じて頭注で校異を示した。

一、底本の明らかな誤植はこれを正した。また、底本にないふりがなをつけた場合には、（　）を付して底本のふりがなと区別した。

一、踊り字・繰返し符号については、濁音の次の清音にゝ、濁音にゞが用いられている場合、異なった品詞にまたがって用いられている場合、行頭に来る場合は、かな、あるいは漢字に改めた。

一、見開き二ページごとに本文の部分に一、二、三の番号を付し、それぞれについての頭注を各ページ上欄に収めた。また、頭注で十分に注解しえないものについては巻末に補注として詳述した。この検索のためには頭注文末に↓印で補注番号を示すこととした。

一、注釈の表記は新漢字・新かなづかいにより、難読漢字の読みは（　）に入れてその語の下に置いた。ただし、引用文の

かなづかいは原文どおりとした。

一、注釈の内容は、先行研究の成果をとりいれながら、作品の主題・発想・構成・文体・語法などにかかわる事項注および典拠とされたと思われる先行詩文の指摘に重点を置き、必要な語釈をも加えた。また、原則として、頭注は表現に密着しながら作品を客観的に読解していくことを主とし、補注では、典拠の考証、作品の特色・背景・成立事情の考察、先行研究の紹介・検討など、作品をさらに味読していくための作品論を展開することを目ざした。

一、本文・引用文以外の数字表記は、「十二」「二百三」とはせず、「一二」「二〇三」のように記した。ただし、明治以降の年号を（　）に入れて示す場合は、洋数字により（明33・4）（大14・6）（昭24・12）のように示した。

一、注釈中では、書名および東西の古典作品名は『　』、新聞・雑誌および詩篇・浄瑠璃・謡曲の題、論文名などは「　」で示すことを原則とした。

一、詩集には初版本の挿絵を適宜挿入した。

解説

藤村詩集解説

山室　静

一　新しき詩歌「藤村詩」

藤村詩は、いわば近代日本の二度と帰らぬ青春の時期に咲き出た秀麗な花であった。その花の命は短かった。彼はわずか五、六年にして詩を捨てて散文に転じ、周知のように小説家としての道を歩んだ。そして近代詩そのものも、藤村時代のいわゆる新体詩の形式を去って、その後のあわただしい詩風の変遷の中に、今日では藤村詩とはほとんど無縁のもののような地点まで来ている。

しかも藤村詩は、今日でも依然としておびただしい読者をもち、既にさまざまの刊本や文庫本などが出ているのに、なお次々と新編があらわれ、注釈本すらが求められている。それはつまり、藤村詩が単に日本近代詩草創期の一古典として文学史的価値をもつとか、あるいは文豪藤村の青春の形身として省みられるとかにとどまらぬ、それとして不朽の生命をもっているからだとしなくてはならない。

これだけ長い生命をもち、広い読者層をもつ詩集は、他にはないのである。その秘密はどこにあるのだろう。

夫レ明治ノ歌ハ、明治ノ歌ナルベシ、古歌ナルベカラズ、日本ノ詩ハ日本ノ詩ナルベシ、漢詩ナルベカラズ、是レ新体ノ詩ノ作ル所以ナリ。

明治一五年、外山正一、井上哲次郎、矢田部良吉らが『新体詩抄』初編を出すにあたって、編者のひとり井上は、昂然と右

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

のように宣言した。封建日本の古い殻を抜け出して、近代日本への歩みを大きく踏み出した明治が、従来の和歌・俳句、さては漢詩ではみたしきれぬ詩心の胎動を感じて、それを盛るべき新しい詩形を探り求めた事情を、それは端的に語っていた。

編者らはこの抱負に立って、シェークスピア、グレー、テニソン、ロングフェローその他欧米詩人の作を訳すとともに、自らも若干の試作を示した。それらのほとんどは、表現も粗笨で、どちらかといえば詩心の乏しい学者の手すさびにすぎず、編者らの意図にそぐわぬ出来栄えにとどまって、多くの嘲笑を招きさえした。にもかかわらずその試みは、多くの反響を若い世代の間によび、しきりに類似の試みを誘い出して、まもなく〈新体詩〉なるものが文壇に一応の市民権を確保しえたのであった。それはひとえに編者らの自負したごとく、新しい時代が新しい詩を求めていたからであったろう。

実を言えば、この新しい詩型探索の道は、『新体詩抄』出現のはるか前からはじめられていたというべく、維新以前にさえ、蕪村の「春風馬堤曲」などのような突然変異的に清新な試みがあったし、西欧詩の訳の試みも、勝海舟その他によってなされていたのである。続いて維新後のキリスト者たちの「讃美歌」や「詩篇」の訳や、文部省編の「小学唱歌」、また福沢諭吉、植木枝盛らの啓蒙思想家や民権家の訓蒙の詩にさえ、その端緒はあったであろう。ただ、これらの人々の試みには『新体詩抄』の作者らの「夫レ明治ノ歌ハ、明治ノ歌ナルベシ、古歌ナルベカラズ」と宣言したごとき、新しい時代には新しい詩が必要とされる痛切な自覚がなかった、あるいはあっても足りなかったことが、これを目立たぬものとして、ついに新詩創成の功績を、さして詩に縁なき大学教授の井上・外山・矢田部らにさらわれる結果になったのであった。

ともあれ『新体詩抄』の出現は、この新詩創成のやむべからざることを顕在化した点だけでも、大きな功績であった。

しかし、正直に言って、こうして文壇に一応の市民権をえたものの、〈新体詩〉の地位はまだいたって不安定で、その前途と可能性については、かなりの危惧がもたれたようである。それは一つには、詩歌が国語の最も醇美なるものであることを要求されるのに対し、この『新体詩抄』の編者らの示した実作があまりにお粗末であったり、詩情に遠かったりしたこと、またそれ以後おびただしくあらわれた作にも、ほとんど見るべきものが乏しかったことによるだろう。しかし、要はこの新しい詩型を駆使して、他の詩型ないしジャンルでは十分に表現しえない文学の世界を開拓し、その魅力によって人々を捉えてはなさぬだけの天才をもつ詩人が、まだ出現しなかったことにあったといえる。詩歌が醇美なることを要するだけに、詩型とことばをあらためるには最も保守的で、いくら時代に要請されたからといって、早急に新衣を着こなすようなわけには

けっしていかないからだ。

かくて〈新体詩〉は当初の勇ましい宣言にもかかわらず、その後はむしろ棘の道を歩むことになり、この創成期に新しい試みを示した多くの詩人が、山田美妙、湯浅半月、中西梅花らをはじめ、中道に仆れるか、詩を見捨てるようになる。そんな中で、森鷗外、落合直文、小金井喜美子らによる訳詩集『於母影』（明治二二年）は、欧詩を雅醇な国語に飜して、はじめて日本語による新詩創作の可能性を示したものとして、すこぶる注目された。次いでは『楚囚之詩』（明治二二年）や『蓬莱曲』（同二四年）の北村透谷、詩集『抒情詩』を出した宮崎湖処子、国木田独歩、松岡（柳田）国男らの仕事が目につく。

しかし、明治三〇年八月に藤村の『若菜集』が出るに及んで、それら先輩や知人らの仕事は、すべてこの一巻の達成の前に色あせる趣きがあった。それほど『若菜集』の成功は完全であった。それは流麗典雅な調べとことばに若々しい情感をみなぎらして、まさしく和歌でもなく俳句でもなく、詩でなければ表現しえない美の世界を開いてみせ、ほとんど完全に若い世代を魅了したのであった。それまでの先人たちの努力にもかかわらず、なお全体として業績は貧しくまた雅醇さを欠いて、とかく憫笑と、将来の可能性への危惧を抱かせがちだった新詩は、ここに最初の豊かな開花を見せ、日本語でも詩が書けることをみごとに実証したのであり、それは同時に詩の魅力が、はじめて国民の前に示されたことであった。かくて、薄田泣菫、蒲原有明、河井酔茗以下の詩人たちが、続々と藤村のあとを慕って詩作にはげみ――そこには与謝野鉄幹、土井晩翠のように、藤村と雁行しながら別の天地を開いた人もあるにせよ――、新詩はついに日本の土に根をおろすことになったのである。

まことに藤村こそ日本新詩の確立者であり、その後のすべての詩人は、藤村詩、ことに『若菜集』の影響下に出て来たといっても、さして過言ではないだろう。

そのことが、つまりは藤村詩を近代詩の古典として、今日にいたるまで愛誦される一種の国民詩にしている大きな原因であったのだ。それらの詩には、たしかに彼一個の青春の歎きや歓びだけでなく、近代日本の日ざめの息吹が濃く重くこめられて、この二つの青春の二度と繰り返されがたい幸運な重なりと諧和において、いともめでたい響きを伝えているからであった。

だから藤村は、のちに合本『藤村詩集』をまとめる時に、昂然と序に書きつけることができた――

遂に、新しき詩歌の時は来りぬ。
そはうつくしき曙のごとくなりき。あるものは古の預言者の如く叫び、あるものは西の詩人のごとくに呼ばはり、いづれも明光と新声と空想とに酔へるがごとくなりき。（中略）
新しきうたびとの群の多くは、たゞ穆実なる青年なりき。その芸術は幼稚なりき、不完全なりき、されどまた偽りも飾りもなかりき。青春のいのちはかれらの口唇にあふれ、感激の涙はかれらの頬をつたひしなり。こゝろみに思へ、清新横溢なる思潮は幾多の青年をして殆ど寝食を忘れしめたるを。また思へ、近代の悲哀と煩悶とは幾多の青年をして狂せしめたるを。
われも拙き身を忘れて、この新しきうたびとの声に和しぬ。
たしかに藤村は、ここで彼自身が十分気づいているように、長い眠りから覚めて新しい曙を迎えようとしていた時代の鼓動をいち早く感じ取って、声高らかに歌ったのであった。しかも、その時代の感情と翹望を代表するほどに、その声は美しく深い響きをもっていた。だからして、広く国民の胸に訴える幅をもっていたのではある。
しかし、時代との相関を言っただけでは、まだ藤村詩を、同じくこの新詩の創成期に若々しい声をあげた他の詩人たちの試みと区別して、その作にのみ永続的価値を与えることになった詩の内実については、まだ何事をも言っていないのと等しい。その措辞や調べや、思想や感情の性質や強さ深さ――私たちは一歩をすすめて、藤村詩のこの内実に踏み入ってみなければならないのだ。
上に引用した合本『藤村詩集』序は、実はまだ前半だけで、ごく一般的な発言にとどまっていた。しかし後半には、そこに作者の主体的な感懐が洩らされていて、藤村詩の秘密についてある手がかりを与えてくれるのだ。そこで、ついでにこの部分をも摘記しておこう。
詩歌は静かなるところにて想ひ起したる感動なりとかや。げに、わが歌ぞおぞき苦闘の告白なる。
なげきと、わづらひとは、わが歌に残りぬ。思へば、言ふぞよき。ためらはずして言ふぞよき。いさゝかなる活動に励まされて、われも身と心とを救ひしなり。（中略）
生命は力なり。力は声なり。声は言葉なり。新しき言葉はすなはち新しき生涯なり。

われもこの新しきに入らんことを願ひて、多くの寂しく暗き月日を過しぬ。
芸術はわが願ひなり。されどわれは芸術を軽く見たりき。むしろわれは芸術を第二の人生と見たりき。また第二の自然とも見たりき。
あゝ詩歌はわれにとりて自ら責むるの鞭にてありき。
藤村一流の高調した美文で、言うところは必ずしも論理的でないが、それを整理してみれば四つのポイントにまとめることができようか。
一つは彼が芸術をけっして芸術のための芸術の方向に求める者ではなく、何よりも新しい生涯を求めて、芸術をむしろ第二の人生、第二の自然と見ようとする人生派的要求をもち、しかも、ここでは明らかな形ではふれられていないが、藤村の実生活が当時は八方ふさがりのような状況だったため、それだけ芸術的に人生的に苦悩を強いられ、多くの寂しく暗き月日を過ごしたこと。それがつまり彼のいう「おぞき苦闘の告白」であったのだ。
二つには、そういう人生的要求をもち、しかも、ここでは明らかな形ではふれられていないが、藤村の実生活が当時は八方ふさがりのような状況だったため、それだけ芸術的に人生的に苦悩を強いられ、多くの寂しく暗き月日を過ごしたこと。
三つには、そういう藤村も、詩人としてのいささかの活動に励まされて身と心を救うことができたということ。
四つには、それらのすべてを支えたものとして、「詩歌は静かなるところにて想ひ起したる感動なりとかや」と、ワーズワースのことばが深い共感をもって引かれているのだと思う。つまり作者は、人生から一歩退いて苦しかった青春の体験を回想の中へ送りこみ、ある距離をおいて現実の生を眺め、歌うことで、その詩法を確立し、かくて詩人として立つことができたことを語っているのである。
『若菜集』に集められた詩は、大きく改作されて収録された「夏の日」ただ一篇を除き、すべて明治二九年九月に仙台の東北学院へ赴任(ふにん)してからの作で、それも満一年ほどの短時日の間に成っている。これらの流麗典雅な詩が、堰(せき)を切ったような勢いで豊かにほとばしり出たのは、それまでの長い藤村の失意と彷徨(ほうこう)と低迷の「おぞき苦闘」の日々を思えば、まさしく奇跡的な回生であり、新詩人としての誕生であった。この回生の秘密をどこまで解きあかすことができるかどうか。

二　「女学雑誌」から「文学界」へ

彼が文学に心を寄せたのは明治学院の三年生ごろからで、学友の戸川秋骨や馬場孤蝶とともに、当時学院で催されたキリスト教会連合の夏期学校に出席し、大西祝博士の「希臘道徳より基督教道徳に移るの変遷」の講義に感激したり、期せずして友と同じころに手に入れた英訳ダンテの『神曲』について語りあったりすることで、友情を深められ、ともどもに学芸の道に志すことになる事情は、のちの小説『桜の実の熟する時』が、かなりによく伝えている。彼はことにイギリス浪漫派の詩人に最も親しんだようで、バーンズ、ワーズワース、バイロンらは、その愛読書であったらしい。大陸の文学者としてはゲーテに心を惹かれている。しかし、そうした西欧の詩人によって誘発された感懐がただちになんらかの作品になってほとばしり出るという趣きは、初期の藤村には乏しかった。彼はモーレーの『イギリス文人伝』の幾篇かを抄訳してみたりしているにとどまる。

彼はまた他方で、十数代にわたって村の名主や問屋をかねてきた旧家の儒教的空気や、ことに平田派の国学に心を傾け、また香川景樹風の和歌をたしなんだ父の薫陶もあって、キリスト教主義の学院に通いながらも、常に漢学の勉強を捨てず、また和歌や俳句にも親しんでいる。こういう二筋道を歩むことは、当時の学生のむしろ通例ではあったろうが、由緒ある旧家の重みを背負った藤村にあっては、事情の一層重たいものがあったにちがいない。まして彼は幼くして上京して以来、ずっと他家に寄食しているいわば居候であり、すべてにおいて自由な行動や感情の解放を妨げられて、気がねと忍耐を重ねなければならぬ身であった。このあたりに、一方で西欧風の新しい人間解放の思潮に共感しながらも、容易に全身的にその流れに身をゆだねることができず、他方でつねに家の伝統にひかれ、それに束縛されて、この両方の相剋の中に思い屈して、容易に吐け口を見出せず、鬱々とした思いに彼を長らく低迷させた事情があったかと思われる。

明治学院を卒業しても、彼はまだどう進むべきかの方針がきまらず、恩人の吉村忠道が横浜に開いた雑貨店に、言われるままに手伝いに行く。しかし、どうしても商売に身を入れることができず、カウンターの下にテーヌの『英文学史』を開いてのぞき読みをしているところを兄に見とがめられて叱責されたりする。ついに意を決して、彼は旧師の木村熊二からかねて

紹介されていた女学雑誌社の巌本善治に手紙を書いて、飜訳の仕事をわけてもらうことになる。こうして明治二四年秋のころから、当時大きな勢力をもっていたこの雑誌に、飜訳を主に、時に若干の自作の文章をのせはじめたのが、詩人藤村の出発であった。

「女学雑誌」に寄せた彼の文章は、いずれも無署名であったり種々のペンネームを用いたりしているので、同定がむずかしいが、五、六十篇の多きにのぼる。しかし、藤村自身の筆になるものは、「郭公詞」（ワーズワースの「郭公に寄せる」の評釈）と、芭蕉の「猿を聞く人捨子に秋の風いかに」に托した美文「故人」と、この雑誌に寄せた最後のものである詩「別離」のただ三篇と見てよいようだ。他はすべて飜訳、紹介であって、それも雑誌の性質から、文学的なものは意外に少ない。しかもその文学的なものも、『源氏物語』や『紅楼夢』の一節の訳、またシェークスピアの『ヴィナス・アンド・アドニス』の訳があるかと思うと、「甌北が李太白を評するの一節」「随園詩話の数節」のような漢詩論の紹介、「元禄時代の韻文」「西行詠花詞」その他、俳人歌人の紹介があるという風で、そこから特定の好みないし方向を見出すことは、ほとんど不可能に近い。

これらの「女学雑誌」時代の習作をいちいち吟味して、それが藤村の形成にどこまで参与しているかを考えることは、筆者にはその能力もなければ、興味も乏しい。もちろん、上記三つの自作の文章や、またシェークスピアの『ヴィナス・アンド・アドニス』の訳「夏草」などから、かなりはっきりした形での西欧的なヒューマニズムへの傾斜を引き出すことはできる。ことに「夏草」ではそれが濃厚な恋愛、愛欲の讃美となっている点（『紅楼夢』の一節や『源氏物語』明石の段の紹介も、これにつながるだろう）は、後の藤村詩につながるものではある。しかし、他方で美濃派の支考や、それに近い横井也有の俳文の野狐禅的な洒脱に惹かれるところや、おそらく養家の吉村家で養われたと思われる浄瑠璃・歌舞伎趣味があって、前者の方向にブレーキをかけたり、不純にする結果を来たしているようだ。「故人」がせっかく芭蕉がただ見て過ぎた捨子を拾い上げるという新機軸を出しながら、全体としてへんに洒落た美文に仕立ててしまったこと、「夏草」を浄瑠璃調に訳したところなどに、それが端的に現われていよう。

一口で言えば、藤村はまだはっきりと自己の進むべき道を見出していないのだ。

たとえば、「元禄時代の韻文」である。これは「本朝詠史」というものの紹介（笹淵友一氏は支考の「本朝文鑑」「和漢文藻」の抄出といっているが、どうか）らしく、支考が自作その他の俳諧詩を多く引いて論評を加えたものの摘記だが、その冒頭で藤

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com